
殺人ゲーム

伝次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人ゲーム

【Nコード】

N6857R

【作者名】

伝次郎

【あらすじ】

再婚を間近に控えた田川俊子は、結婚相手である江島を、一人息子の信二になついてもらおうと、温泉旅行を計画する。信二は薄汚れた人形を持っていたが、その人形と話しをしているようにも見えたと。

旅館に着いてから不可解な事件が連続する。ゲームをしにいった信二を探しに行った俊子が迷子になって、次々と死んでいく人を目の当たりにする。信二はゲームに夢中だ。しかしそのゲームも、人形と相談しながらの、殺人ゲームのようであった。

人形は俊子の隠された秘密を知っている。そして信一も、ある秘密を知っていた。

その一

(一)

テーブルの上に置いてある結婚式場のパンフレットを見て、田川俊子は溜息をついた。

時代が変わった、と言えばそれまでだが、最近の披露宴は派手になり過ぎて、まるで芸能人のディナーショーを模したかのような形式が多くなっているようだ。

そびえ立つウエディングケーキは言うまでもなく、ゴンドラに乗って登場したり、ドライアイスの白煙の中、マジックショーでも見ているかのように、突然あられもない場所から現われたり……。

派手婚、地味婚 などと世間では区別をつけているようだが、要するにどれだけ本人たちが納得するか、満足するか、ということではなからうか。

いくらお金をかけて豪華な披露宴を執り行ったとしても、招待された客は 親友や両親などの一部を除いて 祝儀袋に吸い込まれて行く高額な紙幣との決別を惜しむように、忘年会さながらの宴を、バカ騒ぎして楽しむしかないのだから。

「今さら派手婚はないわよね……」
俊子はパンフレットを閉じて、散らかっている部屋を片付け始めた。

地味だろうが派手だろうが、俊子にとってはどっちだっていい。披露宴の予行演習でもやったかのようなこの部屋を、まずはきれいにすることが先決だ。

今日は友人たちが久しぶりに集まって、俊子の結婚話に花を咲かせていた。

「結婚しちやいなさいよ」

「みんな祝福するからさ！」

「もういいんじゃないの？ 三年も経ったんだから」

と、それぞれが口を揃える。女が三人よって「姦しい」とはよく言ったもんだ。

他人事とはいえ、祝儀のことは忘れて、好き勝手にシンデレラを作り上げて楽しんでいるのかもしれない。

「でも、あの子がねえ……」

俊子はやはり踏ん切りがつかない。

というのも、俊子にとって、これが初めての結婚ではないからだった。

前夫の田川和雄が事故死して丸三年。土地も財産も、何一つ残してくれなかった。いや、もちろんそんなものを期待していたわけではない。ただ、主婦としての生活をもっと楽しませて欲しかっただけなのである。

結婚したのは十一年前。俊子は二十二歳になったばかりで、二十四歳の彼とは本気で付き合っていたはずではなかった。でも、「出来ちゃった」子供は産みたいし、彼のことも人間的に好きになっていた。連れ合いとして、「間違いない人」だな、と……。

出来ちゃった結婚ではあったが、きつかけがどうあれ、お互いに納得して結婚したのだから、それはそれで楽しんでいたはずだった。しかし三年前、彼は死んでしまった。かっこよく逝ってくれれば良かったのに、酔っ払って側溝にずっこけて死んじゃったんだから、なんとも情けない。というか、泣いていいのか、笑っていいのか……。

全く、三十歳で未亡人になった私の気持ち、誰も分かってくれな
いだろうな。

おっと、前夫のために弁護しなくてはならない。何も残さなかったと先ほど述べたが、唯一残してくれた宝物がある。

それが今、最大の難関になっている、俊子にとっての一人息子だった。

「信二？　　信ちゃん？」

階段の下から、俊子は声をかけた。

二階の部屋に閉じこもっているのか、夕飯を食べてから顔を見ていない。

しかし階段を駆け上がる音を聞いたのだから、間違いないだろう。外へ出るには、俊子たちがいた居間を通らなければならないのだから。

ゆっくりと二階へ上がって行った俊子は、ドアをノックしようとして……。

「キャツ！」

突然ドアが開いて、白い顔の人形が目の前に現われたのだ。

驚いた拍子に足を滑らせ、階段から落ちそうになった俊子の腕を、信二はとっさに？んでいた。

「お母さん、大丈夫？」

人形を抱いた信二が、心配そうに訊いた。

「あんた……何やってるの！　びっくりするじゃない！」

「びっくりするのはこっちだよ。そこにいるの、知らなかったんだから」

と、信二が困惑している。

ま、それはそうかもしれないが、あの人形を間近に見ると、古風な幽霊が出現したようにしか見えないのだ。

いつだったろうか。数年前、その人形は信二がどこからか拾って来た物だった。

着物を着た日本人形のようにでもあるが、黒い髪は肩まで伸びて、眉の上はまっすぐ切り揃えてある。白地に赤い花柄の着物は、泥まみれになっていたのか、ひどく汚れていた。

白かったであろう顔もすすけて、細く墨で書かれた目がかすむほどであった。

「そんな物、捨ててきなさい。気持ち悪い……」

最初に見つけたとき、俊子はそう言って信二を叱った。

「いいじゃないか。僕の大事な友達なんだから」

信二はそう言い返していた。

それ以来、信二はいつもその人形を放さなかったのである。

その人形を手に持ってたとはいえ、ちょうど俊子の目線だったから、いかにも浮かんでいるように見えたのだ。

部屋に入って、やつと落ち着いた俊子は、

「ねえ……相談があるんだけど」

と、ベッドに腰掛けて、信二の顔をうかがうようにそつと言った。

「なあに？」

と、信二はそつけない。「お金はないよ。ゲーム買ったから。それにこの前貸したばかりじゃん」

「ごめん……。お給料が入ったら、すぐ返すから」

しまった！ そういえば、先週借金したばかりだ。忘れていたわけではないが、まだ返す余裕はない。

たかが一万円ではあるが、信二にとっては大金だ。毎月こつこつと貯めているお小遣いがどれだけあるのか知らないが、ちゃっかり者で、しっかりと貯め込んでいるらしい。

申し訳ない、と思いつつも、今まで育てて来たんだから、それくらいの金額、「相殺」してくれたっていいじゃない！ なんて親らしからぬことを考えていると……。

「おめでとう」

突然、信二がボソツと言った。

「え？」

「結婚するんだろ」

「うん……まあ……」

「あのお金、返さなくていいよ」

「だって……」

「僕からのお祝い金さ。ちょっと少ないけど、子供だから勘弁してくれるよね」

そう言いながら、信二はすました顔で、人形の髪を指で梳いている。

俊子は驚いた。いや、意外だったと言うべきかも知れない。今までのことを考えると、どうしても信二の言葉は信じられない。あれだけ反対していたのに、何が信二を変えさせたのだろう。

「ちよつと待って」

と、俊子はためらいながら、「それって、結婚してもいい……ってこと？」

「そうだよ。ダメだなんて、最初っから言っていないじゃないか」

「だって……」

だって、あの「嫌いなおじさん」が、あなたのお父さんになるのよ。

と俊子は言いかけたが、口から言葉が出てこない。

人形の髪を整えた信二が、その頬をなでながら薄く笑っていたのである。

「いつ？」

と、信二が訊いた。「夏休み中はやだよ。新婚旅行について行く気はないからね」

「うん。だからその前に 七月の最初の日曜日が大安なんだ」

「大安吉日？ そう。そりやめでたいね」

「だからさ、明日からゴールデンウィークじゃない」

と言って、俊子は信二の手から人形を取り上げた。「ね、どこか旅行でもしようか。あの人と三人で」

その瞬間、信二の顔から笑みが消えた。

俊子は気づいていただろうか。笑みが消えたのがその言葉が発せられた時ではなく、人形を奪い取った時からだったということ……。

…。

「あのおじさんと？」

「いいじゃない。信ちゃんのお父さんになるんだから、よく話をしとかない」と

と言いつ終らない内に、信二は人形を奪い返していた。

そして、乱れた人形の髪を整えながら、

「旅行か……。いいよ、僕もゆっくり考えたかったから」と言つた。そして、「いいチャンスかもしれないしね」

再び笑みをたたえて、信二は言つた。

俊子はためらつた。信二の最後の言葉が、自分に対してではないと分かつたからだ。

信二は人形と話しをしている。

誰も喋つてはいないのに、信二が肯くように首を振っている姿を見て、俊子は背中に走る冷たいものを感じていたのだった……。

その二

(一一)

三年前に改築されたばかりだというのに、手入れの行き届いた庭園に面したその旅館の和室は、近代建築の気配すら感じさせない古めかしさがあつた。

日本人の情緒を守りたい。古きよき姿を壊してはいけない。そんな女将の精神が如実に表れた結果、創業当時を再現したかのような純和風旅館に生まれ変わっていたのである。

そして、林立する高層ホテル郡を尻目に、早くから予約しておかないと宿泊できないという名物旅館となっていた。

ダメだと思いつながら、前日だというのに、俊子は予約の電話を入れてみた。もちろん満室ということで断られたのだが、

「以前お世話になった田川ですが……」

と試みてみた。そしてお世話になった事情を説明する。

するとしばらく待たされてから、

「どうぞおいで下さい」

と、快い返事を頂くことになったのである。

ホテルではなく、こんな旅館を選んだのは、日本古来の温泉を楽しみたい、という希望があつたからだつた。

「しかし珍しいね。デイズニールランドに行きたい、とでも言うのかと思つてたよ」

と、浴衣姿の江島邦雄が言った。「まさか九州まで来るとは思わなかつた」

「あの子、ちょっと変わつてるのよね。小学生だというのに、年寄り臭いつていうか、古いものが好きで」

そう、この温泉を希望したのは、意外なことに信二だったのであ

る。

田川俊子はまだ洋服姿。お昼過ぎにはこの旅館に着いたが、露天風呂や展望浴を楽しんでいる江島とは別に、信二と二人で温泉街を散策していた。

お風呂は夜になってからでいい。どうせ、また入るかもしれないのだから……。

江島邦雄と知り合ったのは、四、五年も前になるだろうか。俊子より一つ年下で、三十二歳になったばかりである。もちろん当時は亭主もいたし、気軽な遊び相手だったのだが、ここ一年くらいで親密になっていった。

定職には就かない、いい加減な男だと思っていたのに、俊子のために、いや、信二に認めてもらうためなのか、最近では二人で会う暇さえ惜しんで仕事に精を出していた。

そして半年ほど前から結婚の話が浮上していたのだが、信二がどうしてもなつかなかったのである。

トントン、とドアを叩く音。待つほどもなく、仲居が料理を運んで来た。

慣れているとはいえ、その手際のよさは感服させられる。その間にも、笑みを絶やさず話し掛けてくる愛想の良さは、さすがにプロの接客業そのものだ。

鉢物を並べながら、仲居は話題を変えた。

「親子三人で旅行なんて、本当にいいことですね」

江島と俊子の目が合った。どっちに言ったのだろう。さて、何と答えたものか。

しかし仲居の視線は江島の方だ。

「いや……それが……」

と、江島が口ごもっていると、

「ええ、私たちも初めての旅行なんですの」
俊子が割って入った。

「まあ、子供さんもさぞかし喜んでおいででしょう」

「そうね、まるで遠足に行くみたいにはしゃいでいましたわ」

「小学四年生……だったかしら」

仲居はちよつと考えてから、「ということとは、もう結婚されて、十二、三年」

「いえ、まだ結婚はしていませんの」

と、俊子は言った。「二カ月後に結婚するんです。私たち」

江島が何か言いたそうである。顔をしかめ、手でブロックサインでもしているようだ。

「まあ、そうでしたの」

と言いながらも、仲居は頭の中で、今の会話を整理しているらしい。

ちよつと気まずい空気が流れたが、俊子は気にする様子もなく、

「再婚なんです、私たち。本当は結婚してから旅行したかったんだけど、あの子がどうしても行きたい、って言うものですから」

と、にべもなく言っている。

「おい……」

江島がたしなめるように言った。

「何よ、いいじゃない。嘘じゃないんだから」

と、俊子は真顔になっていたが、

「もうお食事になさいますか？」

準備を終えた仲居は雰囲気察して、「ビールでもお持ちしましょうか？」

と言つて、立ち上がった。

「あ、それじゃ、ビールを」

と言つた江島の言葉を制して、

「ちよつと待つてください。あの子が帰ってくるまで待っていますから」

俊子はそう言いながら、観光案内のパンフレットを広げていたのだった。

信二がまだ帰って来ない。

散策から帰って来て、信二はゲームセンターに行っているはずだ。まだやっているのかしら……。

「見てきた方がいいんじゃないのか」

江島が心配そうに言った。

「大丈夫よ。あの子はしつかり者だから」

「迷子になつてるかもしれないぞ」

「そんなことないわ」

と、俊子は至って呑気だ。

もともと心配をかけるような子供ではない。一人っ子ならではの自立心があるのかもしれないが、何でも自分でやつてのけるし、勉強も遊びもそこそこにこなしている。友達も多い方ではないが、親分肌で面倒見のいい男の子なのだ。

その信二が珍しく荒れていたのが、江島との結婚話が浮上してからだった。

江島の話を見ると、急に暴れだしたり、泣き叫んでいたのである。「結婚なんかしちやいやだ!」

そして、僕のお父さんは一人なんだ、と泣き喚いていた……。

「なあ、お前探して来いよ」

と、江島が言った。

「私が?」

「お前の子供だろう」

「あなただつてお父さんになるんではよ」

「まだ籍は入れていないんだ。正確には、まだ」

「いいわよ! 行けばいいんでしょ!」

俊子はパンフレットをまとめると、苛立つように立ち上がった。ゲームセンターがあるのは、そう遠くではなかったはずだ。敷地が広いだけにちょっと迷路のようになっていて、この部屋からでは問題ない。

前の廊下を、まっすぐ行けばいいのだから。

「何よ、あの子ったら」

部屋を出た俊子は、ボタンと叩きつけるようにドアを閉めると、その廊下を左の方向に歩いて行った。

そう、左に……。

俊子の背中を、入れ違いに帰って来た信二が見つめていた。

「お母さん……」

やっぱり間違っただね。

信二は小声で呟いた。もちろん俊子に聞こえないように。

そっとドアを開けて部屋に入った信二は、いかにも走ってきたかのように荒い息をついて、笑顔で言った。

「ただいま！」

信二は部屋を見回して、「あれ、お母さんは？」

と、母の姿を探している。

「今、信二君を探しに行っただけど、会わなかった？」

そう、たった今なのである。会わないはずがない。

「ううん、僕、ずっと廊下で遊んでたけど、誰も出て来なかったよ」

「そう、おかしいね……」

「大丈夫だよ。すぐ帰って来るさ」

信二は並べられた料理を見ながら、途中でやめて来たゲームのことを考えていた。

もうちよつとで殺せたのに……。

ま、いいか。第一ステージはクリアしたんだから。

信二は江島に背を向けて、もって来たリュックの中に手を差し込んだ……。

どこに行っても客室のドアしか見当たらない。

もともと方向音痴なのだ。ゲームセンターが部屋を出て右だったことは、ここまで来ても、まだ気がつかないのである。

廊下の奥まったところに、客室ではないらしい大きなドアが、少しだけ開いていた。

その中を人影が横切る。どうやらこの旅館の従業員らしい。

「あの人に訊いてみようかしら」
俊子は重い足取りで、そこを直指して歩き出した。

客室への料理はほとんど運び終えて、調理場はやっと落ち着きを
取り戻していた。

後は掃除をするだけ。板前たちは別室に引き上げ、今ごろまかな
い料理を口に行っているころだろう。

調理場の裏口から、客室マネージャーの大森が顔を出した。プラ
イベートでは人のいいおじさんのだが、仕事中は「鬼軍曹」と、
みんなから呼ばれる五十がらみの男である。

「何だよ、居残りか？」

若手の板前が一人、退屈そうに欠伸をしていた。

「あつ、すみません」

慌てて立ち上がった板前は、「今日は朝から、通しでやってるも
んで……」

と、またわき出しそうになった欠伸をかみ殺している。

「いや、いいんだ。みんな飯食ってるんだろ。いけないのか？」

「菊の間 の料理がまだなんです」

「菊の間 ? 七時の予定じゃなかったのか、あの部屋」

「ええ、そうなんですけど、まだ帰って来ていないらしいんです」

「誰も、か？」

「子供が遅いから、ということだったんですけど、今度は探しに行
った母親が戻って来なくなったらしくて」

と、客の前では見せられないような、懨然とした顔で言った。

「だったら先に出せばいいじゃないか。もう八時を過ぎているんだ
から、冷めても仕方ないよ。そのまま温めても、硬くなったら却っ
て印象を悪くするだけだ」

「でも……」

「いいから出せ。責任は俺が取る」

と、マネージャーは言った。

「はい、分かりました」

といつても、前菜や刺身などはもう出してある。不景気なこの時期としては珍しく、十三品もの料理が並ぶ最高級のコースを、菊の間 の客は選んでいたのだ。

後は蒸し物と、メイン料理になる伊勢えびの網焼きを提供するだけだ。

板前は仲居を招んで、まずは蒸し物を持たせた。

「炭は焼いてあるのか？」

と、マネージャーが言った。

「はい、大丈夫だと……」

板前の目が、客室の廊下へとつながる出入り口を見た。すぐ運べるようにと、卓上の炭鉢がそこに置いてあるのである。

しかし、赤い火が見えない。まさか消えたのでは……。

板前はいけすから伊勢えびをすくおうとして、その手を止めた。そして炭鉢に近寄って覗いてみる。

火が消えたのではなかった。炭のつめ過ぎで、その方で燻ったまま、まだ上部まで火が上がっていないのだ。黒い炭の隙間から、かすかに残っている赤い火が見える。

火バサミを持って、炭を入れ替えようとしたときだった。

「あのう、すみませんが……」

客と思われる女性が、廊下の方から声をかけてきた。「ゲームセンターって、どっちに行けばいいのでしょうか」

そして一步、調理場に足を踏み入れようとした。

「ゲームセンター？」

板前はちよつと考えて、「そんなのあったかな……」
と言つて、炭鉢に火バサミを入れた。

その瞬間、爆発でもしたかのように、突然、炭鉢から炎が吹き上がった。板前は避ける暇もない。前かがみになっていたせいか、上半身が一瞬にして火に包まれたのである。

弾かれたように飛び上がって、のたうちまわる板前。苦痛に喘ぐ

その表情を、女性はまるで映画でも見ているような錯覚にとらわれながら見ていた。

助けなきゃ、と思っても体が言うことをきかないのだ。

板前の体が立ち上がって、女性に抱きつこうとした。髪が、身体が、すべてが燃えている。

女性はとつさに、非常用の鉄の扉を閉めていた。

扉を叩く音。そして苦悶の音が聞こえていた。

「助けてくれ！」

と、何度も繰り返しているのだろう。しかしその声は炎に包まれ、言葉にはなっていない。

いや、女性には、はっきりとした言葉になって、いつまでも聞こえていたのである。

「殺してやる……殺してやる！」

その声を背中に聞きながら、女性は静まり返った廊下を走り出していた。

その三

(三)

散々探し回ったが、俊子の行方は分からない。入れ違いに信二は帰って来たものの、今度は俊子が迷子になったのだろうか。

旅館の中を二周 いや、三周はしたかもしれない。しかしどこにも、我が子の安否を心配する母親の姿は見られなかった。

「俺の部屋、どこだっけ……」

どこに行っても同じような造りにしか見えないその棟に入って、江島はため息をついた。

盆を手に持った仲居が、その並びの真ん中辺りの部屋から出て来た。そして後を追うように、

「おねえちゃん、また来てね」

と、屈託のない笑みを浮かべ、信二が顔を出した。

やはりこの棟でよかったんだ、と安心すると、江島は急ぎ足に駆け寄った。

「信二君、お母さん、帰って来た？」

と言いながら、その視線は部屋の中に飛んでいる。

「ううん、まだだよ」

「そうか……。ずっと待ってたのかい？」

「うん、そうだよ」

「退屈だっただろう。ごめんね」

「大丈夫だよ。僕は一人じゃないから」

と、信二は言った。「いつもあいつが、そばにいてくれるからね一人じゃない、って、誰かいるのだろうか。たまたま偶然、友達でも……」。

「あのおねえちゃんがね、僕と遊んでくれたんだよ」

行きかけた仲居を、信二は指さした。

仲居は振り向くと、

「申し訳ありません。揃われてから、とは思ったんですが、先に料理を運ばせていただきました」

と言つて、深々と頭を下げた。

「こちらこそ申し訳ない悪いのは俺たちなんだから」

江島の言葉が止まった。

仲居が顔を上げて、その目が合ったのである。

「春美、か？」

と、江島は言った。

仲居は　いや、野添春美は、江島の顔を見てためらいの表情を浮かべた。

「お前、こんなところにいたのか……」

和服姿の春美は、突然その姿を見せなくなったときはまるで別人のような容姿だった。自慢していた長い黒髪は、頭の上でひとつにまとめてあるし、輪郭を浮き出させていた派手な化粧のかけらもうかがえない、地味な素顔をさらけ出している。

あれから五年しか経っていないというのに、すでに中年おばさんの気配すら感じられた。

江島と同棲していたのが二十一歳だったから、まだ二十六になつたばかりの女盛りのはずなのに……。

「探したんだぞ。俺に黙つて」

「どうしてここにいるの？　また私を連れ戻しに来たの？」

と、春美の声が小さく震えた。

「そうじゃない、偶然なんだ」

江島は真顔になって、「俺、結婚することになつた」と、言った。

「まだそんなこと言ってるの？　あなたは」

と言いかけたが、そのやり取りを信二が聞いている。

「ちよつと待つててくれ。後で話をしよう」

とりあえず信二を部屋に連れて行くと、江島はまた出て来て、ドアをきつちりと閉めた。

どんな話になるか分からない。もし春美が騒ぎ出したりしたら、今の江島では、なだめることすらできないだろう。

信二には聞かせたくない。いや、聞かれてはいけない話なのである。

「元気にしてたのか」

と、江島は言った。しかし春美はうつむいたままだ。

「まだ恨んでるのか、俺のこと」

「さあ……どうかしら。恨んでない、と言えば嘘になるわね」

「悪かったと思ってるよ。いや、あのままいてくれたら、きつと君を幸せにすることが出来たはずなんだ」

「私が稼いだお金で？」

春美は顔を上げて、「人には言えないような飲み屋で働かせられて、あげくの果ては身体を売る商売。そしてその収入は、すべてあなたの懐に入るんですものね。そんなお金で、私を幸せにできた？」

と、一気にまくし立てるように言った。

「だからそれは」

「何度も逃げたわ、私。でもあなたは地の果てまでも追いかけてきた。そして連れ戻される。待っているのはあなたじゃなくて、女に飢えたバカな男ども。弄ばれて、傷つけられた私は、あなたに甘えるしか休まるところがなかったわ」

そして春美は、苦笑した。「お金を払って、あなたに慰めてもらってたんですものね。逃げない方がどうかしてるわ」

過去の暗い思い出がよみがえったのか、かさついた頬に涙がこぼれ落ちた。

江島は言い訳をしようと思っていた。今だけではない。いつか会うことがあったら、今度は俺が面倒を見てやる、と言いたかったのだ。ちゃんと仕事をして、と……。

しかし場所が悪い。結婚の話来信二に納得してもらおうべく、この

旅館に来ているのだ。過去のことは一切忘れ、新たな生活を送るスタートの旅行なのである。

そして今大事なことは、俊子がいなくなった、ということだった。「ごめんなさい……。私、料理を運んで来ます。次が最後だから」と、春美が向きを変えたときだった。

ギギツ、と音がして、部屋のドアが少しだけ開いた。

信二が退屈しているのだろう。もちろん母親を心配しているのだろうが、子供としてはどうすることもできない。

「信二君、ごめんな。ちょっと」

と言って、江島はドアを開けた。

しかし、そこにいるのは信二ではなかった。自宅に置いて来たはずのあの人形が、ドアの下で江島を見上げていたのである。

しばらくして、信二がやっと顔を出した。

「あれ？ お話は終わったの？」

そう言いながら、信二はスリッパを履いている。

「お母さんを探しに行くの？」

と、春美が訊いた。

「ううん、退屈だから、ゲームしてくる。いいでしょ？」

「ああ……。いいよ。でも、お金は持つてるのかい？ お昼、たくさん使っただろう」

「大丈夫だよ」

と、信二は言った。「だってお金いらなんだもん、あのゲーム」人形を抱き上げた信二は、静かな廊下をさつさと歩いて行った。

江島はしばらく黙ったまま、その後姿を見つめていた。

話しをしている。返事をするように肯きながら、信二は語りかけているのだ。

あの人形に……。

「あの子、子供じゃないみたい」

と、春美が言った。「話しているときはもちろん子供そのものなんだけど、時々、大人の眼になるのよね。何だか怖いわ」

信二の後ろ姿を、江島と春美は見つめていたのだった。角を曲がって、信二の姿が見えなくなった。

「とにかく、料理を運んで来ます。早く探して下さいね」

と、春美は言った。「あなたの大事な、奥様を」

いやみなのか、罵声を浴びなかつただけでもありがたかつた江島は、歪んだ口の端をあわてて隠した。もちろん、腹の底から湧き出そうになった笑みである。

と、その時、ざわめく人の声が聞こえて来た。あちこちから人が出て来て、調理場のある建物へと吸い込まれて行く。

そして、サイレンの音が遠くから聞こえて来た。

何事だ？ と一応は考えたが、自分には関係ない。他人がどうなるうと、俺の、これからのことが大事なのだ。

慌てる同僚を引き止めた春美は、話を聞いて駆け出していた。

「あの野郎、どこに行きやがったんだ！」

江島は毒づいた。「いなくなるなら、あのガキ、連れて行けつんだ」

一人になった江島は部屋に入って、自分で持ってきたウイスキーを、そのまま口に押し込んでいた。

ざわついた調理場に入って行った春美は、マネージャーの姿を見つけて駆け寄った。

といつても、対応に追われて気づいてくれない。却って邪魔者扱いされてしまうほどのパニック状態に陥っていたのである。

「マネージャー！」

春美は思わず、その胸倉を？ んでいた。

「おおっ、春美君か！」

やっと気づいたマネージャーは、「どうした。何かあったのか？」と、あべこべなことを言っている。

「それはこっちの台詞じゃないですか。一体何があったんですか？」

「うん……板前が火に包まれて……」

「包まれて、って、火傷したんですか？」

「うん。もう、助からないかもしれない……」

「ちよつと待つてください。何がどうなったのか、さっぱり」

「俺にも分からんのだよ」

マネージャーは頭をかきむしって、「炭鉢から突然、火が吹き上がったんだ。そしてあいつは火まみれになった」

と、自分が見たことを詳細に語り始めた。

春美はマネージャーが信頼している部下の一人だ。仕事はてきぱきとこなし、辛いことがあっても笑顔を絶やさない、強靱な精神力の持ち主である。まだ若い仲居だが、仲間たちの信望も厚く、いわばリーダー的存在と言っても過言ではない。

そんな春美を、マネージャーは個人的にも可愛がっていたのだ。た。

「そんなことって、あると思うかい？ 消えかかった炭鉢が、まるで爆発したように炎が吹き上がったんだ」

信じられない、といった様子で、マネージャーは溜息をついた。

「それって、菊の間 の炭鉢ですか？」

「そうなんだよ。あの女 いや、いかな、こついうことを言っちゃ 早く帰って来れば、こんなことにはならなかったのに」

「他には、誰もいなかったんですか？」

「ああ、彼が一人で残ってたんだ」

と、マネージャーは言った。「炭を入れ替えるとき、何か独り言を呟っていたよ。客が遅いからイライラしていたんだろつ。ゲームが何とやら、とね」

「そこまで言ってから、考えるように首をかしげたマネージャーは、ゲーム？ 何の関係があるんだろつ……」

と、今度は自分が呟いていた。

炎が吹き上がったとき、俊子は板前の横にいたはずだ。しかしマネージャーは、その姿に気づいていなかったのである。

いや、見えないことはないはずなのだが……。

調理場の奥から、救急隊によって担架が運ばれて来た。もちろん毛布が掛けられていて、惨たらしい姿を見ることはできない。春美は黙祷すると、

「菊の間 の料理、どうでしょうか」
と、マネージャーに向かって言ったのだった……。

全く、とんでもない所へ来てしまった。

こんなことなら温泉ではなく、遊園地に行っていた方がよかったかもしれない。

もつとも、迷子になればどっちだって同じではあるが……。

江島は早くから出されていた刺身をつまみながら、一人でぼやいていた。

「あの女、もう一度食ってやるかな」

まさかこんなところで春美に出会うとは思わなかった。逃げられたときは惜しい気もしたが、散々稼がせてもらったんだから、感謝こそすれ、恨んでは酷というものである。

それにあの業界からは足を洗ったはずだ。いつまでも「ヒモ」の生活を送っているわけにはいかない。

だからこそ、平凡ではあるが、たまたま知り合った俊子と結婚することにしたんだ。子供はいるが、飽きの来ない女である。ちよつと金遣いは荒いが、何といても三十を過ぎてなお、あの吸い付くような妖艶な身体をしている。

もし生活が苦しくなったら、また売ればいい……。

江島は部屋を出た。いつまでたっても二人とも帰って来ないので、落ち着いていられなかったのである。しかも最後の料理だって運んでこない。

「おい、伊勢エビちゃん」

江島は鼻歌などを歌いながら、「僕ちゃん、腹がへったよお」と、とりあえずゲームがある建物へと歩き出したのだった。

扉を開けると、信二の後姿が見えた。テーブル式のゲームモ

モニターを凝視しながら、手元のレバーをカチャカチャと動かしている。

そっと近寄って脅かしてやろう、と江島は思って、足音を立てないように進み出ると……。

「失敗しちゃったじゃないか。余計なこと言うなよ」と、何やら呟いている。

そして、またゲームに熱中しだしたと思ったたら、

「あーあ、関係ない奴が消えちゃった。どうするんだよ。男の方からやる？ 汚い奴だから、ぐちゃぐちゃにして、最後に潰そうかと思つてたのに……」

信二は顔を上げると、「お前がはつきりしないからいけないんだぞ！」

と言つて、横に置いてある人形の背中を、思いつき張り飛ばしたのだつた。

床に転がった人形は、壁に当たって動きを止めた。そして うつぶせになった人形の目が、江島をじっと睨んだのである。

人形を拾おうとした信二は、ハツとして振り返った。まるで誰かの声を聞いたように。

「何してるの？」

信二の冷たい声が言つた。

「まだ、ゲーム 終わらないんだよね」

江島はためらいながら声をかけた。

「途中で失敗したから、また最初からやり直しなんだ」

「そうか。そろそろお腹がすいたんじゃないのかい？」

「ううん、全然。それより、お母さんは帰って来たの？」

「いや、それが……」

はつきり「帰っていない」と言えばいいものだが、それをためらわせる異様な雰囲気があつたのである。

人形を横に座らせた信二は、再びモニターに向かつていた。

「ねえ、第一ステージだけクリアしたいから、それまでいいでしょ

？」

そして、お母さんが帰って来たら呼びに来てね、と言って、ちょっとだけ振り返った。

その目を見たとき、江島は一瞬、誰かの声を聞いたような気がしたのだった。

相変わらずゲームに熱中している信二。時折その手が、人形を叩いている。その姿は、いかにもじゃれあっている友達同士のようにも映っていたのである……。

菊の間に戻って来た江島は、廊下の窓から見える救急車の赤いランプを見ていた。

「何事だ？」

調理場での出来事を、この時の江島はまだ知らなかったのである。

その四

(四)

廊下を通り抜けて中庭に出ると、俊子は茂みの中に身を隠していた。

悪いことをしたわけでもなければ、誰かに追われているわけでもない。

ただ、火だるまになった人間を見て、それを放置してきたと言う慙愧に堪えられなかったのである。あの恐ろしい映像が、まだ脳裡に焼きついて離れなかった。

しかしいつまでもこうしてはいられない。

信二が心配しているだろう。早くあの部屋に帰らなくては……。

「私の部屋、どこ？」

驚いて、脅えて、散々駆け回っていたのだ。現在自分がいる場所さえ分らない。

とりあえず廊下に出てみた俊子は、見当をつけて歩き出した。

と、向こうから旅館の従業員らしい女が歩いて来る。俊子は部屋を訊いてみようと呼びかけた。

「あのう、すみません」

手を差し伸べるが、女は気がつかないのだろうか、目の前を通り過ぎようとした。

「ちょっと、聞こえないの？」

と、今度は大きな声で言ってみたが、振り向こうともせず、女はさっさと行ってしまった。

「何よ、無視して！」

一体どういう教育をしているのかしら！

憤然としていると、また人がやって来る。ここの調理師であろう、

白衣を着た男だ。

「あのう」

俊子の目の前でその男は立ち止まった。「菊の間 って、どこに行けばいいですか」

俊子はおずおずと訊いてみた。

「坂本さん、ちょっと待ってよ！」

と、俊子にはなく、今通り過ぎたばかりの女に、男は言った。苛立つように、女が戻って来る。

「早くしなさいよ。もう救急車、行っちゃったわよ」

「ごめん、飯食ってて。それであいつ、どうだったんだよ。まさか……」

「たぶん、だめだろう、って。上半身が黒焦げだったらしい」と、二人で駆け出した。

その間、俊子は何度も話しかけていた。しかし一向に返事をしてくれない、まるで自分たち以外は誰もいない、といった様子なのである。

どうして気づいてくれないのか、さっぱり分からない。私、透明人間にでもなったのかしら。

でもあの言葉だけは、俊子にとって衝撃なものだった。

駆け出す間際、女が吐き捨てたのである。

「菊の間のおばさんが悪いのよ。旦那と子供をほったらかしていつまでも帰って来ないから」

そして、「きつと男漁りに行ってるのよ。好きそうな顔してたもん」

と、言っていたのだった……。

とにかく、早く部屋に帰らなければ。

俊子はその建物を出て、次の棟へと飛び込んだ。似たような造りなので、元の場所に戻ったような錯覚にとらわれてしまうのだが、すれ違う人は様々だ。

もっとも誰もが、声をかけても返事をしてくれなかったのだが……

…。
その棟の客室には、やはり 菊の間 の札は見当たらなかった。思い切つて、見知らぬ部屋のドアを叩いてみるか。客であれば、自分の存在に気づいてくれるかもしれない。

いや、無駄だろう。今まで誰も返事をしてくれなかったのだから。と、その時、隣の部屋のドアがスツと開いた。そして顔を出したのは、湯治客であろう、温和な顔をした老婆だった。

声をかけよう、と思った俊子だが、やはりそれはためらわれた。どうせまた無視されるのが落ちだ。すると、

「ああ良かった。お嬢さん、トイレはどこだったかのう」

と、訊いて来たのである。「歳を取ると忘れっぽくていかん」

私？ 私に言ったのよね？

「おばあちゃん、私、見える？」

俊子はおずおずと訊いた。

「年寄りをバカにしとるのか？ 頭は惚けても、この目だけはしっかりしとる」

老婆はグツと顔を近づけて、「おお、なかなかの美人じゃな」

と言ったのだった。

俊子の顔に、やっと笑顔が見えた瞬間だった。

「やっと見つけたぞ、あの化け物」

と、信二は言った。「今度こそひねり潰して、ぶつ殺してやる」ゲームのモニターを見ていた信二は、なかなか先に進めず苛立っていた。

とにかく第二ステージは何としてもクリアしたい。次のステージがどんな場面なのか、早く見てみたいという衝動に駆られていたのである。子供にとって、ゲームに終わりはないのだ。

信二はまたレバーに手をかけていたが、まだためらっていた。

目指す標的がシークレットになっていて、簡単にはクリアできない。やっと見つけたと思ったら、操作ミスで関係ない者が消されて

しまつのである。

次もあの手でやってみるか……。

信二がレバーを動かそうとしたときだった。

「何だよ、邪魔するなよ!」

信二の手が止まった。「え? さっき使ったから、もうだめだつて?」

ゲームのルールでは、そのステージで同じ攻撃をしてはいけならしい。

それもそうだよな。さっきは火炎放射機でゲームオーバーになつたんだから、違う攻め方をしなくてはいけない。

「じゃ、どのアイテムを使おうか」

と、信二は訊いた。

もちろん、人形に向かつてである。

「え? そんなことできるの?」

へえ、とかんしんしてた様子で、信二はレバーを動かすと、タイミングを見計らって赤いボタンを力強く押した……。

このゲームは、至って簡単な古いタイプのものだ。迷宮に逃げ込んだ殺人鬼を探して、与えられた三つのアイテムを使ってやっつけるといふもの。ハンター役である信二は、前後左右に移動するレバーと、アイテムを選ぶ緑のボタン、そして攻撃する赤いボタンを駆使して、姿の见えない相手を探さなければいけない。そして攻撃する。

しかし相手が見えないだけに、特別アイテムとして透視能力がある三人のスパイを使うことができた。

殺人鬼を消してしまえば次のステージに進むことができるのだが、ゲームといえどもそこは殺人鬼。最初に送ったスパイは、火炎放射に失敗して自滅してしまつたのである。

だが、裏技があるらしい。人形が、それを教えてくれるのである。ゲームモニターの画面が色鮮やかに輝き始めると、信二は辺りに響き渡るような奇声を発していたのだ……。

事務室の机でふさぎこんでいたマネージャーは、ポンと肩を叩かれて、顔を上げた。

「君か……」

野添春美が、優しく微笑んでいた。

「落ち込まないで下さい。あれは事故なんだから」

「うん、分かってはいるんだけどね」

と言われても、自分の目の前での出来事なのだ。助けよう、火を消そう、と思っても、突然のことに動揺して身体が動かなかったのである。もがき苦しむ板前を見て、見えない何かに縛り付けられたように突っ立っていたのだった。

俺が殺したようなもんだ……。

マネージャーは大きく息をついた。

「客室の状況はどうだね」

「ええ、食事も終わって、何とか落ち着いています」

と、春美は言った。「でも、何となく気になることがあって……」

「どうした。サイレンを聞いて、宿泊客が大騒ぎしてるんだろう」

「それなら分かるんですが……」

春美はためらうように、「いつもと同じなんです。騒いでいるのは身内だけで、お客様は部屋でくつろいでいたり、また温泉に入ったりして誰も気がつかないみたいで」

考えられません、と困惑していた。

あれだけ騒いだのに、客室は静まり返ったままなのだ。人間の心理を考えれば、数百人の内、せめて数人程度は野次馬がいてしかるべきではなからうか。

「菊の間 の客、帰って来たか？」

と、マネージャーは訊いた。

「まだです。でも、もう出せないでしょう。厨房があんな状況じゃ」

「だからといって、このままじゃいけない。他の料理に変えていた

「だくよう、僕が頭を下げに行つて来るよ」

「でも、どこに行つたのかしら。夕方ごろは、子供さんと一緒に資料館で遊んでいるのを見かけたんだけど」

と、春美は呟くように言った。

「資料館で？」

まさか、といった様子で、マネージャーは顔を上げた。「何をしていたんだ？」

「さあ、ゲームをしてくる、って声が聞こえたような気もしましたが……」

もちろん信二の声である。この旅館に着いてから、放射状に広がる建物の中央にひっそりと佇んだ小さな建物に、何度も出入りしている姿を見かけていた。

そんなに楽しいところなのだろうか？

資料館といつても、春美はそこに何かがあるのか、まだ知らなかった。見た目には廃屋同然で、春美の入社以来、客も従業員もほとんど出入りがなかったのである。

「それで、子供は帰つて来たのか？」

「ええ、さつきは帰つてただけど、お母さんが帰つて来ないから、また……」

マネージャーは立ち上がった。

机の引き出しを開けると、慌てて何かを探している様子。そして取り出したのは……。

「早く行こう」

「行こう、って……。菊の間のお客さんは、まだ」

「資料館だ。そんなバカなことがあるか」

マネージャーは怒ったように、「あそこは数年前から廃館になつてるんだ。この半年、鍵を開けたことなんかあったんだぞ」

と言つて、錆のついた古いキーを振り上げたのだつた……。

事務所の裏口から中庭に出ると、少し離れたところに資料館の裏側の壁が見える。取り囲む近代的な客室棟と違って、今にも崩

れ落ちそうな古い木造の壁には、長い間放置されていたのだろう、密生した植物がへばりついていた。

客室棟から無数の明かりが漏れているし、渡り廊下や中庭のいたるところに照明があつて、夜の九時を過ぎても暗いということはない。

しかし資料館の付近には照明がなく、まるでブラックホールのようにもあつた。

マネージャーが春美と共に、静まり返った中庭に出たときだった。どこからともなく、女の叫び声が聞こえた。

そして待つほどもなく、マネージャーを探す若い仲居の声。

閉鎖されているのだから暗いはずなのに、資料館の中に小さな灯火が見える。それを横目に見ながら、マネージャーは声の聞こえた方へと駆け出した。

「あつ、マネージャー！」

とても平常心とは言いかねる状態で、入社したばかりの仲居が飛びついて来た。

「どうした！」

「あの……お客様が……お婆さんが！」

と言つたつきり、放心状態で言葉が出ない。ただ、今駆け出てきた客室棟を指差して、小さく震えていた。

また何かあつたのか？

マネージャーはその棟に走り込んだ。

そして、立ちすくんだ。

「来るな！ 入つてはいかん！」

追つて来た春美を、マネージャーは制したのである。

とても見せられない。こんな光景を見たら気を失ってしまうだろう。いや、気丈なマネージャーでさえも、自分が正気なのかさえ分からなかつたのである。

「資料館に、子供がいます」

と、春美は言った。「窓のところから、こつちを見て、笑つてて

……」

春美の声は震えていた。

マネージャーの目の前に広がる光景は、何となく想像できる。あの焼け爛れた板前の姿も、ちらりとはあるが見てしまったのだ。何かが起きている。この平和な旅館の中で、信じられないような現象が起きているのだ。

春美は、資料館で笑っている少年を見て、背筋に冷たいものを感じていたのだった。

「マネージャー。 菊の間の料理、どうしましょう……」

もはや春美も、平常心ではない。

しかしその声は、マネージャーには聞こえていなかった。

廊下に横たわる老婆は、もう人間の姿をなしていない。まるでピンポン球が弾けたように、廊下のいたるところにぶつかったのだらう。

壁や天井に無数の血痕を残して、その身体はすでに潰れ果てていたのだった……。

その五

(五)

またゲームオーバーか……。
何度やっても第二ステージをクリアすることができない。迷宮に逃げ込んだ殺人鬼は、信二のレバー操作を欺くかのように時折その姿を見せるのだが、持っているアイテムはことごとく抹殺されてしまう。

さっきは火炎放射でゲームオーバーになったが、今度は何をされたのだろう。

相手を攻撃しようと思ったのに、あっという間に自分のコマが潰されてしまったのである。

立ち上がった信二は、ちょっと息苦しくなって、窓辺へと寄って行った。

「あーあ……何だか面白くない」

と、信二は呟いた。「ねえ、そろそろやめようよ」

振り返って、いすに置いたままの人形に言ったのだ。

じっと人形を見つめる信二。会話をしているのであるう、肯いたり、首を横に振ったり……。

「え？ 外を見ろって？」

信二は窓を開けた。大人たちが数人、慌てるように行ったり来たりしている。

何だかゲームの一場面を見ているようで、信二はクスツと笑った。その時、さつき料理を運んでくれたお姉さんと目が合ったのである。

仕事で大変なんだね。頑張つてよ。

そんなつもりで、信二は笑顔で手を振ったのだった。

「ねえ、もうお部屋に帰ろうよ。僕、お腹が」と
と言いかけて、その顔から笑みが消えた。

そして吸い込まれるように、またゲームの椅子に座る。

「うん、ごめんなさい」

信二はそう言って、痛くなった手でまたレバーを握った。「あいつ、殺さなきゃいけないんだよね」

そして信二は、思い出した。

そうだ、裏技があったんだ！

かなり高度なテクニクを要するが、敵を引き付けて、迷宮のすべてを一瞬のうちに焼き散らしてしまうことができるらしい。

しかし用心しなくてはならないのは、迷宮が爆発する瞬間、目前に迫った殺人鬼の首を、自ら刺し貫らなければならぬのだ。

もし失敗したら、ゲーム終了。単なるゲームオーバーではなく、ゲーム機そのものが使えなくなるらしい。

人形だけしか知らない「ゲーム」は、そこで終わってしまうのだ。「ごめんなさい。僕、頑張るよ」

信二は何度目になるか分からないスタートボタンを、ためらいながら押したのだった……。

全く、どこに行きやがったんだよ……。

江島はいいかげん、イラついていた。俊子はいつまでも帰って来ないし、信二はゲームに熱中している。一体何のためにここまで来たと思ってるんだ。

あのバカ息子の機嫌をとるため、わざわざ借金までしてきたというのに……。

誰も帰って来なければ、料理だって中途半端なままだ。

江島は内線の電話と掴み取ると、

「おい、どうなってるんだ！」

と、一方的に怒鳴りつけた。「料理がなかったら、酒くらい持って来い！」

「あの……申し訳ございませんが、今は」

「何なら女でもいいぞ。春美がいるだろう。接客をしると伝える。伊勢えびの代わりに、あいつを網焼きにして喰ってやるから」

江島とて、本気で言っているわけではない。しかしこれではあまりにも退屈だ。

でも、ちよつと言い過ぎたかな……。

「いや、すまん……。とにかく、ビールでも持って来てくれないか。冷蔵庫も空っぽなんだ」

少しばかり反省して、江島は優しく言った。

電話は切られているのか、何の反応もない。ツーとでも聞こえればいいが、バチツ、バチツと何かが弾けるような音が聞こえるだけだ。

よく聞いてみると、何かが燃えるような音にも聞こえる。

そうか、ここに出すはずの炭焼きを、客がないからといって、向こうで食っているのかもしれない。

江島は電話を叩き付けた。

「なめたまねしやがって……」

浴衣の帯を締め直して、江島は部屋を飛び出した。

その途端、旅館内の照明が一斉に消えて、辺りが一瞬にして暗くなった。

廊下も部屋も、右も左も分からない。窓の外も、闇夜のごとく真っ暗になった。

「な、何だ？」

しかし待つほどもなく、非常灯がほのかに灯り始める。

どうせブレーカーが落ちたんだろう。それとも、電気代を支払ってないのか？

呑気なことを考えた江島だったが。

まるでロウソクの炎に包まれたように、円形に広がった建物がぼんやりと浮かぶ。

そしてその真ん中で、あの資料館だけが明るく浮かんでいた。

もちろんライトアップしているわけではない。その室内だけが、電気が切れることもなく、まぶしいくらいの光を解き放っていたのである。

輝く窓の中に、ゲームに熱中する信二の姿が浮かび上がっていた。「あのガキ！」

江島は駆け出した。

どうしよう、というわけではない。いくら邪魔だとはいっても、結婚しようという俊子の息子だ。ちょっとだけ注意しよう、と思っただけなのだ。

中庭に出た江島は、遠くに見える赤い炎を横目に、資料館に走り込んだ。

客室棟のドアを閉めたマネージャーは、中庭に降りて、春美の肩を優しく抱いた。

「大丈夫か？」

「ええ、私こう見えても、昔、スケ番だったんですよ」

と、春美は言った。「また救急車を呼びますか？ それとも、警察？」

肩が冷たくなっているのは、夜になって冷たい風が入って来たせいばかりではないだろう。強がってはいるが、その体は小刻みに震えていた。

マネージャーとしても、どう対処していいか分からない。

立て続けに不可解な事件が起こったのだ。いや、事故かもしれないが。

事故？ そんなはずはない。板前のことに関しては事故かもしれないが、全身を潰された老婆がどんな事故にあったというのだろうか。

「救急車はもう間に合わない。警察に」

と、マネージャーが言ったときだった。

建物の照明が一斉に消えたのである。

「何だ？」

一瞬真つ暗になってから、非常灯がぼんやりと浮かぶ。春美の肩を抱いたマネージャーの手に、ギョツと力が入った。そして……。

「マネージャー、教えてください」
と、春美は言った。

その目は、唯一明かりが灯った資料館を見つめていた。

「あの資料館、どうして改装のときに壊されなかったんですか？」

「そんなことはどうでもいい。今は」

「そのことが大事なんです、今は！」

と、春美は叫ぶように言った。「何だか分からないけど、あそこ」
に何かあるような気がして……」

しばらくその顔を見つめていたマネージャーは、

「君はさつき、あそこに子供がいる、と言ったね」
と、訊いた。

「ええ、こつちを見て笑ってました」

「宿泊客の子供さんかな」

「ええ、たぶん。菊の間 の、あの子だと思ったんですが……」

春美はちよつと考えて、「でも、表情が違うんです。顔は子供なのに、まるで老人のような笑い方。あの子、まともではありません。というより、何かに取り憑かれたみたいで……」

と言ったが、自分でもまだ、それが 菊の間 子供なのか迷っていた。

最初から誰もいなかったのかもしれない。単なる見間違いで、動揺した春美の脳裡に浮かんだだけではないのだろうか。

「あの資料館はね、この鍵がないと中に入れないんだ」

「でも……明かりが点いてます」

「そうなんだ。あそこだけが……」

と言って、マネージャーは資料館を見つめた。「あの時、資料館を取り壊して、露天風呂を作ろうと言う計画があったんだ」
マネージャーは静かに語り始めた。

全館改装の話を持ち出したのは、ワンマン経営を続けていた先代の社長であった。

何年ぶりかで受けた健康診断の結果、潰瘍の疑いがあると診断されて、そして入院。一週間の予定だったはずなのに、しばらくは退院できないという。何か特別な病気があったのだろうか、誰も教えてくれない。

いや、教えられるはずがなかった。もう、長くないということは……。

そんなとき、突然改装の話を持ち出したのである。後で考えたら、自分でも気づいていたのかもしれない。だからこそ、大胆な構想を打ち出したのだろう。

もちろん老朽化した客室は印象も悪いし、突発的な事故だって起こりえない。周囲には近代的なホテルが立ち並び、時代と共に取り残されたように、この旅館だけが古めかしく佇んでいたのだ。

古さの中に日本の温泉ありき。そんな哲学さえ持っていた先代の考えが変わって来たのは、年齢と共に老いて行く自分の身体を、その建物に投影していたのかもしれない。

まるで人が変わったように、改装の話を持ち出したのである。

しかし、もちろん、反対の意見はあった。周りのホテルに影響されず、日本の伝統を守れ、ということだ。

結局、女将の意見を取り入れて、古さをそのままにした旅館に造り替える事になったのだが……。

いざ着工という段階になって、先代より待ったがかかったのである。

「資料館だけは、手をつけないでくれ」

そして、「あれだけは……」

そんな言葉を残して、先代は永眠したのだった……。

マネージャーの話聞いて、春美は小さく肯いた。

「あの資料館、歴代の社長さんがお住まいになっていた、と聞いたことがあります」

思い出したように、春美は言った。

「うん、元々は先代の一族が住んでいた住居だったんだよ。それを先代が継いだときに、資料館にしちまったのさ」

と、マネージャーは言った。「でも、仕方なかったんだよ。この旅館を存続させるためには」

「周りのホテルの影響、ですか？」

「うん、それもある。何しろ大手企業に買収されかかっていたからな、ここの敷地と建物。こんな田舎なのに、宅地と商業地の問題でもめていたらしい」

「それで、あの建物を遺してくれと」

「建物じゃない」

と、マネージャーは遮った。「あの中に歴代当主の肖像画がかけられているのは知っているかね？」

「いえ、私、まだ入ったことがないんです」

「そうか……。あの建物の中の部屋に、肖像画と、ある日本人形が守り神として置いてある。それを移動させたらいけないという言い伝えがあったらしい。先代も古い考えの人だったから、素直に守っていたんだよ」

「人形……」

春美はちよつと小首をかしげた。

どこかで見たような……。もちろんそんなものはどこにだって置いてあるだろう。しかし何となく春美は、その言葉が頭の隅に突き刺さっていたのである。

「それから、今の若社長が幼少のころ遊んでいたゲーム機が置いてある。何十年前前のやつだから、もう使えないけどね。時代の変遷を見てきた代物だから、先代と同様、大事にしまつとけ、って若社長が閉鎖してしまつたんだよ」

ゲーム機？

「ちよつと待つてください！ この旅館、ゲームセンターってありませんよね」

春美は、声を荒げて言った。

「ああ、先代が嫌いだったからな。それに若社長もこの旅館にはふさわしくないと……」

「人形は？」

春美の脳裡に、非現実的な映像が浮かび上がっていた。

「あそこに、まだあるんですか」

「いや、それが、先代が亡くなった後、女将が人にあげてしまったんだ。迷信だからって、言い伝えなんて信じない人だから」

「誰か その人形を受け取った人、誰か分かりますか」

「確か……」

マネージャーはちよつと考えて、「工事を請け負った建設会社の人じゃなかったかな。本社から来ていた人なんだけど、先代がともお気に入りだね」

と、ためらいながら言った。

マネージャーとて、三年も前のことを鮮明に憶えているわけではない。しかも、たとえそれが大手企業の建設会社であったにせよ、契約事はすべて経営陣が仕切っていたのである。社員であろうとも、工事関係者と話しをすることは少なかつた。

春美はちよつと考えて、

「もし、言い伝えを守らなかつたら……」

と、囁くように呟いた。「マネージャー！」

突然立ち上がった春美は、

「早く行きましょう！」

と言って、マネージャーの腕を取った。

「待ってくれ、あれは……」

資料館ではなく、その奥の客室棟をマネージャーは見ていた。その一室から煙が立ち上っていたのである。

「今度は火事か？」

もちろん気づいてはいたが、春美は一向に構うふうでもなくその手を引っ張る。

「早く資料館に」

「それよりあの煙が」

「言い伝えが本当なら、資料館に原因があるはずですよ。早く行かなきゃ」

と言い終わらないうちに、春美は走り出していた。

資料館のドアは硬く閉ざされていて、中に入ることは出来ない。

春美は窓の方に廻って見た。鍵がかかって開けることはできないが、中の様子をうかがうことができる。

やっぱりあの子だ……。

菊の間 一人で遊んでいた、あの男の子である。

春美は窓を叩いた。今にも割れるのではないかと思うほどの力で。しかし男の子は、ひたすらゲームに熱中していた。

もう、マネージャーったら、何してるの？ 早く来てよ！ 鍵を持っているのはマネージャーしかないんだから。

すると、植え込みの中からゴソゴソと音が聞こえたと同時に、女が飛び出して来た。

そして資料館の玄関口まで来ると スツとドアを開けて中に入ってしまったのである。

春美は啞然として見ていた。一体どうしたことなんでしょう。

ドアは開いたままになっている。春美は近寄って中をのぞいてみた。

あれは確か、菊の間のお客様じゃ……。ゲームに熱中している子供の背後に、その女は立っていた。

中に入ろうとして ポンと肩をたたかれた春美は、

「マネージャー！」

やっと来てくれた。本当にとろいんだから、このおやじ。

振り向いた春美の顔がこわばった。

そこにいるのはマネージャーではなかった。

不気味な笑みを浮かべた男が、春美をじっと見下ろしていた。

その六

(六)

中庭の茂みの中から、田川俊子は周りの状況を見つめていた。

息子を探すためとはいえ、菊の間を出てからというもの、不可解なことばかりなのだ。無残にも死んでいく人間を見たかと思えば、通り過ぎて行く人が自分の存在を認めてくれない。やっと気づいてくれたと思ったら、やはり目の前でその形を消されてしまうのである。

分からない。何がどうなっているのか、俊子には判断する予備知識さえ持っていないのだ。

厨房で板前が焼け死に、やっと会話ができた老婆は、まるで竜巻に巻き込まれたように潰れ果てて……。

突然、この旅館の存在をアピールしていた照明が一斉に消えた。

一瞬にして、辺りが暗くなったのである。

非常灯がほのかに灯って、俊子は茂みを飛び出した。

目の前に古い建物がある。俊子を待っていたかのように、そこだけが明るい室内灯で浮かび上がっていた。

それを見て、俊子は安堵の溜息をついた。

「やっと見つけた……」

俊子の言う、ゲームセンターだ。立った一基のゲーム台しか置いていないが、ゲーム機が置いてあれば、それだけで充分にゲームセンターなのである。

信二がいるかもしれない……。

俊子は一気にその建物へと駆け込んだ。

部屋の隅に、古いテレビゲームが置いてある。背中を向けて熱中しているのは、間違いなく信二であろう。

俊子は近寄ろうとして 部屋の真ん中に置いてあるテーブルに目が止まった。

信二が持つて来たあの人形が、テーブルの上に鎮座して、俊子をじっと見つめていたのである。

「ねえ、信ちゃん……」

ためらいながら、俊子は小声で言った。

聞こえていないのか、信二はゲームに熱中したままだ。

「ねえ」

「やっと姿を現したか」

声が聞こえた。

信二？ 信ちゃんが言ったの？

俊子はテーブルを廻って、信二の背後に立つ。その動きに合わせて、人形の首がククツと動いた。

「ごめんね、遅くなって。お母さん、迷子になっちゃって」

と俊子が言った途端、ゲームのモニター画面が真っ赤に輝き、しだいに明るさを増していった。

信二の顔が見えた。笑っている。探していた宝物を見つけた

かのように、無邪気に破顔していたのである。

しかし、俊子の存在に気づいている様子ではない。

「ねえ、信二。お部屋に帰ろう」

と言い終わらないうちに、信二が振り向いた。そして冷たく俊子を見つめている。

その目が いや、その目だけが不気味に笑っているようでもある。

「人間の世界って、人を殺したら罪になるんだよね」

信二の言い方は子供らしからぬものだった。

「何を言ってるの？ そんなこと当たり前じゃないの」

「へえ、そう。じゃ、殺人者だったら、罪を償わなければいけないんだよね」

「そりゃそっただけど……」

俊子は訝って、「ゲームの中のお話でしょ。さ、早く帰りましょ」と、信二の肩に手をかけようとした。

「さわるな、人殺し！」

叫ぶように信二は言って立ち上がった。

その目に、今まで見たこともないような憎悪の光が潜んでいる。

「今、何て言ったの？」

俊子は信二を見つめた。

「聞こえなかった？ 人殺し、って言ったんだよ。 あんたのこ
とをね」

信二の口元が歪んだ。笑いかみ殺しているようでもある。

再びゲームに向かった信二は、レバーを握ると、スタートの赤い
ボタンを押した。

「さて、やっと敵を見つけたぞ。今度こそ失敗しないでやっつけて
やるからな」

モニター画面が鮮やかに輝き始める。信二は取り憑かれたように
奇声を上げはじめた。

「ねえ信ちゃん！ どうしちゃったのよ！」

「僕、聞いちゃったんだ」

真つ赤に輝くモニターの輝きを受けた信二の顔が、不気味に笑っ
ている。

「聞いた、って……何を？」

「三年前のあのことさ。 僕のお父さん、事故で死んだんじゃな
いよね。側溝に落ちたのは知ってるけど、そのせいなんかじゃない」

「何を言ってるの？ あなたのお父さんは、酔っ払って側溝に落ち
た。そしてたまたま水がたまってる……」

「すぐに助けていけば、死ぬことはなかったんだ」

「そう……でも、お母さんが気づいたときは、もう手遅れだったわ
「手遅れだった？」

信二がレバーを操作している手を止めた。「そんなはずないよ。
だってお母さんは、お父さんが転ぶところを見てたんだろ。一度は

助けようとして近寄ったけど、意識がないとわかってためらった。そして顔が半分、水に浸かっていたのを見たんだ」

「ち、違うわ！　だって夜中よ。お父さんが帰って来たことすら知らなかった」

「嘘だ！」

信二が叫んだ。「そのまま放つたらかしのしたたら、水が増えて来て、お父さんは溺れ死ぬと思ったんだよね。だから気づかない振りをしていただけ。どう、違う？」

「いい加減にしろさい！」

俊子は信二の頬を叩こうとして　その手が、目に見えない力に食い止められる。まるで誰かに？　まれたような感じた。

そのとき、遠くから何かが炸裂するような音が聞こえた。小さな爆発音にも聞こえる。そして何かが焼けている音……。

信二が慌てたようにゲームに向き直る。

「ねえ、誰がそんなこと言ったの？」

と、俊子は訊いた。

「あいつだよ、あいつ。僕も聞きたくはなかったんだけど、真実を知った以上、悪い奴は成敗しないとね」

「あいつ？　誰よ、そんなデタラメを言うの。もし見ている人がいたら、その人が助けてあげてもよかったんじゃないの。騙されてるのよ、信ちゃん」

「そうかな……」

と、信二は呟いて、「僕、ゲームの続きがあるんだ。あいつとの約束で、最後までクリアしないとここから出られないんだ。お願いだから邪魔しないで」

色とりどりに輝き始めたモニター画面に集中している。

俊子の顔色が変わっていた。

そんなバカな……。

あの時信二は眠っていたはずだし、目撃者がいるような込み入った住宅街ではない。たとえ誰かが見ていたとしても、もう三年も経

っているのだ。今さらそんなことを持ち出す人間がいるだろうか。しかも警察ではなく、小学生の子供にそんなことを言ったとして、一体何になる……。

信二から告げられたことは、まんざら嘘でもない。側溝に落ちる瞬間を見て俊子は駆け寄った。そして助けようとも思ったのだが、たまたま喧嘩していた真つ最中で、懲らしめてやれ、という気持ちが働いたのも事実である。

しかし、側溝の水が増水してくるということまでは知らなかった。もちろん殺してやるうという気持ちなどあるはずもなかったが、泥水に顔を突っ込んでいた夫を置き去りにしてきたのは事実なのだ。でも、誰が見ていたのだろうか……。

「ねえ、信ちゃん」

俊子は小さな声で言った。「本当は誰に聞いたの？」

「だからあいつだよ。ほら」

と言って、信二は俊子の足下を指さした。

俊子がそこに視線を落とす。そしてその目がギョツと見開いた。テーブルの上にあったはずの人形が、俊子を見上げながら、その足に抱きつこうとしていたのだった……。

肩に置かれた手を、春美は振り払った。

「こんなところで……こんなときに！」

「何してるの？」

春美は叫ぶように言った。

「そんな冷たい言い方はないだろ？ お前と俺の仲じゃないか」

男は薄笑いを浮かべている。

「やめてよ、いまはそれどころじゃ」

「やっと会えたんだ。俺はお前を探していたし。お前だっていや、お前には俺が必要だ。こんなところでめぐり逢えたのは、その証拠じゃないのか」

江島邦雄が、そう言って春美に近寄る。

「いいかげんにして！」

春美の手が、江島の頬を叩いた。

「おっと……相変わらず威勢がいいな」

「あなたはここに、何をしに来たの？ 婚前旅行　いいえ、あの子の心を？ むための旅行じゃなかったの？ その子が今、大変なこ
とになっているのよ」

「あのガキか！ どうせゲームしながら俺の悪口でも言ってるんだ
ろう。全く気に食わねえ」

「あなた結婚するんでしょ？ だったら助けたいと思わないの？」

「助ける？ 何をどう助けるんだよ」

「この旅館で起こっている不可解な出来事、あなたも知ってるわよ
ね」

「不可解な出来事？　　ああ、俺の部屋に料理を運ばないで、自
分たちで食っていたってことか？」

江島は鼻で笑って、「なめたまねしやがって」

と吐き捨てた。しかし言い終わらないうちに、春美がその身体を
思いつきり突き飛ばす。酔っていた江島は、ふらついて植え込みの
中に倒れてしまった。

「てめえ、何しやがるんだ！」

「もう、二人の人間が死んだのよ。それも原因不明でね」

「それがどうした！　ポーっとしてるからそんなことになるんだよ」
「誰が殺したと思う？　あの子が……あなたの子供になる信二君が、
ここにいる人たちを殺そうとしているのよ」

江島は一瞬、言葉をなくした。もちろん春美の言っている言葉の
意味が分からないのだ。

「　お前はバカか。小学生の子供が、どうやって人を殺したとい
うんだ」

「直接殺そうとしてるんじゃない。人形がやらせてるだけ」

「人形？　何だそりゃ？」

「信二君が持つて来た人形、あなたも知ってるわよね」

「ああ、あの薄気味悪い奴か。女の子みたいに一日中遊んでるよ。全く情けない……」

「その人形に問題があるの」
春美はマネージャーから聞いたことを、そのまま江島に話した。もちろん自分なりの解釈も含めて。

江島はわけが分からずキョトンとしていたのだったが、
「ふーん、あの人形がねえ」

と言つて、なにやら含み笑いを浮かべた。「だったら、不思議な現象が起こってもおかしくはないわな」

「どういうこと？」

「あの人形は」

と言いかけたとき、資料館の中から俊子の声が聞こえて来た。

江島はゆっくりと立ち上がる。

別れてもいい、と江島は思っていた。結婚するといつても、本気で言っていたわけではない。確かに俊子はいい身体をしているし、金回りだって悪くはなかった。それが結婚の話が浮上して来て実生活が見えた途端、金使いの荒さや、生活に対する優柔不断さが見えて来たのである。

江島とて、女を売ってまで社会の裏を歩いて来た男だ。人のことは言えないのだが……。

しかし、やっと春美を見つけた。また以前のように、強引に連れ去ってみるか。

ちょうど良い。資料館の裏手から炎が立ち始めた。このまま母子ともども焼死してくれたら、手間が省けるってもんだ。

江島が春美に向かって歩き出した。

その時、俊子の叫び声が聞こえた。

「早くしないと、今度はあの人を殺されるかも……」

春美は呟くように言ってから、資料館に入ろうとした。しかしその腕を江島が？んで、強引に引きずり倒したのである。

「ちよつと、やめて」

「どうした!」

江島が春美にのしかかろうとしたとき、マネージャーが手にナイフのようなものを持ってやって来た。

「おい、貴様! 何をしているんだ!」

春美に馬乗りになった江島を、マネージャーの足が蹴り上げた。

「マネージャー、早く!」

春美が叫んだ。

「あの子の中にいるのか?」

「ええ、ずっとゲームに熱中しているみたいで。そのナイフは……」

「君の言うことは間違いないようだ。あの人形はあの子が持っているのか?」

「たぶん持っているはずですよ」

「このナイフであの人形を切り裂いてみる。もし言い伝えが本当なら、何か変化があるはずだ」

「待ってください!」

春美がマネージャーを制した。「もしそれが逆効果になったら……」

…

「一か八かだ。やってみるしかない」

マネージャーはそう言って、資料館へと入って行った。

春美も後に続くこうとして、ふっと江島に目をやってみる。

江島は、不気味な笑みを浮かべていた。

「あの野郎、ぶっ殺してやる」

そんな呟きが、春美の耳に聞こえたような気がした。

資料館の裏手からは、すでに炎が上がり始めていた。

その七

(七)

しがみつくように足に抱きついた人形を、俊子は何度も振り払おうとした。

しかし人形はビクともしない。それどころか、ゆっくりとよじ登ろうとさえしていたのである。

「た、助けて……信ちゃん！」

信二はゲームのモニターを凝視したままだ。俊子の声さえ聞こえていないように。

俊子は人形を？むと、力の限り引つ張ってみる。何度も、手の痛みさえ分らないまま引き離そうとした。

そして 足に人形の爪痕を残しながら、やっとの思いで掴み取る。あまりの不気味さに、俊子は人形を投げ飛ばしていた。

その人形が、偶然入って来たマネージャーの身体に当たって転がった。

足下に落ちた人形を見て、一瞬マネージャーは戸惑いの色を見せる。

「坊や」

信二の背中に、マネージャーは問いかけた。しかし信二は振り向こうとしない。

やはりそうだ……。言い伝えは本当で、あの人形が不思議な現象を引き起こしているのではないだろうか。

マネージャーはおもむろに人形を拾い上げる。そしてその顔をまじまじと見つめた。

何の変哲もない、至って平凡な人形だ。黒いまっすぐな髪に、着物姿。真っ白い顔に、墨で書かれたような細い目。

その瞬間、人形の細い目がギョツと見開いて、血走った眼が見えた。

「うわっ！」

驚きのあまり、思わず人形を放り投げるマネージャー。

その人形が、信二の背後に立っている俊子の足下に、再び転がって来た。

「た、助けてください！」

やっと人が入って来たのを見て、俊子は安堵の思いでマネージャーに駆け寄る。

そしてその腕を取ろうとして。

「坊や、こっちを向いてくれないか」

マネージャーはその存在に気づいていないのか、俊子の目の前を素通りした。

「あの……ちよつと！」

俊子は叫んだ。やはり　やはりこの人にも私のことが見えないのかしら……。

愕然として、俊子はペタンとひざまずく。

誰も自分の存在を認めてくれない。それどころか、目の前で人が死んで行ったのだ。もしかしたらこの人も？ いや、違う。恐ろしい現象に巻き込まれたのは、自分の存在に気づいた人間だけだ。ということとは……。

さつき私は、信二と話しをしたわよね。それじゃ、信二には私が見えている。

えっ？ まさか信二も？

マネージャーが信二の肩を叩いた。

「邪魔するな！」

振り向きもせず、信二が叫んだ。「もうちよつと……あと少しなんだから！」

ゲーム機の後ろにある窓に、赤い光が反射している。ついにここまで火が廻って来たのだろうか。

マナージャーは信二の腕を？むと、力任せにゲーム機から引き離した。

春美はためらっていた。

人形に問題があるとは言ったものの、もちろん確信があるわけではない。

マナージャーの総合的な話と、>菊の間<の子供の異様な雰囲気。それだけであの人形が魔物であると言えるだろうか。

春美はオカルトや超能力といった非現実的なものを信じているわけではない。むしろ現実主義者で、理想を追うこともなく、今の生活をどうするか、明日の食事は……といった平凡な女なのである。

ただそれが裏目に出て、江島という「魔物」に騙されていたのだ。社会の裏世界へと引きずり込まれ、脱出するためには身体を売らなければならぬ。自分だけならそこまで落ちることはなかったのだろうが、あんな男でも一時は惚れていたのだ。

鳥肌の立つような汚らしい男でも、あの人のためなら、と苦汁をなめてまで獣たちにこの肉体をさらけ出して来たのである。

やっと開放された、と思っていた。昨日までは……。

資料館に入ろうとして、春美は振り返った。江島がズボンについた泥を払いながら、不気味な笑みを浮かべている。

やっぱり逃げられないんだ……。

「おい、春美」

江島がふらついた足取りで近寄って来る。「お前も早く逃げないと焼け死ぬぞ」

資料館の裏手から火の手が見える。周りを囲む客室棟も、いつの間にかいたるところから赤い炎が見え隠れしていた。

「あなた、結婚するのよね」

と、春美は訊いた。

「結婚？ そんな話もあつたっけな」

「やっぱりね。どうせいい加減なこと言って、引っ込みがつかなく

なっただんでしょ」

「そんなことはない。俺だって、あんな汚い世界から足を洗いたいと思っただけだ。普通の女をもらって平凡な生活をする。そんな当たり前のことが、やっと見えたような気がしたよ。でもな」

江島はためらいながら、「普通の女というものが、こんなに退屈なものだとは思ってもいなかった」

と言っで、ため息をついた。

「じゃあ、結婚はやめるの？」

「いや、それは分からないが、たとえ結婚したとしても、そう長くは続かないさ」

「どうして？」

「しばらくすると前の旦那みたいに、俺も殺されるかもしれん」

「殺される？ 誰に？」

「あの女さ。 あいつ、自分の亭主を殺したんだぜ」

江島の言葉に、春美は耳を疑った。「もちろん自分で手を下したわけじゃない。酔っ払って側溝に落ちた亭主を、そのまま見殺しにしたんだ。助けていれば死なずに済んだものを……」

「そんなこと、なぜあなたが知ってるの？」

と、春美は訊いた。

「そりゃ……俺もそこにいたからさ。亭主が出張だというんで、ちよつと遊んでいくはずだったのが、夜中にひよっこり帰って来やがったんだよ。俺も殴られるのは好きじゃないんでね、そのまま知らん顔して帰って来た、ってわけさ」

「それじゃ、あなたも同罪じゃない！」

春美は叫ぶように言った。

「おっと、俺を殺人者呼ばわりしないでくれよ。俺はあくまでも客だったんだ」

客？ 一体どんな客だというの！

春美は怒りがこみ上げて来るのを感じていた。

「子供は？」

春美の声は震えている。「何の罪もない子供の将来を考えたことはないのね」

「あのガキか。子供なんてものは、放っておけば勝手に成長していくさ。あの薄気味悪い人形と一緒に」

江島はそう言って、つばを吐き捨てた。

「人形って……あの子が持っている人形のことよね」

春美は江島の言葉に反応した。「あの人形、どうしたの？ いつからもってるの？」

「あれは亭主の土産だったらしい。どこから買ってきたのか知らないが、親が親なら、子も子だぜ。側溝に落ちた父親が大事そうに抱えていた人形を、女の子みたいにいつも抱いているんだ。全く、気色悪い」

「土産……」

「母親も冷酷だが、あのガキだつて冷たいものさ」

と、江島は言った。「死にかけた父親の腕から、土産だけを奪って来たんだから」

やっぱりそうだ。マネージャーが言っていた建設会社の営業マンとは、あの子の父親なのだ。

旅館の改装に向けて先代の社長と話を進めているうちに、気に入られてあの人形をもらって来たのであるう。

そして、たまたま運悪く側溝に……。

しかしあの子は、母親を愛していなかったのだろうか。土産を買ってくる父親を、慕っていなかったのだろうか。

いや、そんなはずはない。どんな人間であろうと、幼い子供にとってはかけがえのない親なのだ。恨めしく思ったり、殺意を抱いたりすることなんかあるうはずがない。

しかし、春美が現実に目撃しようとしているのは、ゲーム機を使って母親を殺そうとしている男の子の姿なのである。もっとも、人形があの子をおっているのであれば、話は別なのだが……。

「どこに行くの？」

と、春美は訊いた。

婚約者、そして自分の子供になろうとする男の子を助けに行くどころか、江島は資料館とは逆の方に歩き出そうとしていた。

「この若さで死ぬのは真つ平だ。さあ、お前も早くついて来い」「あなた、あの人のこと愛していないの？ 私と同じような目に遭わせようとしてるの？」

この人でなし！ という言葉を春美は飲み込んだ。どうせ何を言っても分からない男なのだから。

春美は背を向けた。

「待て、死にたいのか？」

「そうね……あなたというよりは、死んだ方がましかも」

振り向きもせず、春美は資料館のドアを開けると、「この中に、お客様が残ってるわ。いち早く助け出すのが、私たち仲居の仕事なの」

そう言つて、建物の中へと消えて行つたのだつた。

江島はしばし呆然としていたが、思い直したように溜息をついた。そして 唇の端を歪めて、笑つた。

みんな死んでしまえばいい。女なんて、いくらだっているんだから……。

江島は資料館に背を向けると、表玄関の方へ歩こうとして 客室棟の一部から吹き上がった炎が、大きな音と共に中庭へと降り注いだ。

振り向いた。 そう、江島は振り向いてしまったのである。

目前に近づいて来る物体がある。しかしその動きは早すぎて、江島の視線に入るまでに、瞬きするほどの時間を要した。

その脛が持ち上がったとき、身体に激しい衝撃が走ったかと思うと、一瞬にして意識が遠のいていく自分の姿を、江島は見ているよくな気がした。

吹き上がった炎の勢いで、熱く焼けた鉄棒が吹き飛ばされていたのだ。

江島を直撃した鉄棒が、植え込みの中に転がった。そして雑草を
焼き尽くすかのように、鈍い煙を噴き上げはじめていた。

その八

(八)

春美が資料館に入って目にしたものは、まさしく異様な光景だった。

大人であるマネージャーが、小学生の子供を組み敷いているのである。床にねじ伏せ、馬乗りになってその自由を奪っていた。

子供は泣いている……。

だめよ、そんなことしたら！ 却って逆効果になるかもしれないじゃない！

春美は駆け寄って、

「マネージャー、やめて下さい！」

と言って、その腕にしがみつく。

「春美君……早く、あの人形を……」

と言いかけて、コンセントがちぎれ、ゲーム機の裏側に垂れ下がった電源のコードを見つめた。

そうか、このゲーム機は、何年も前から使えなくなっていたんだ……。

信二が資料館に響き渡るような叫び声を上げた。逃れようと必死にもがいているが、押さえ込んでいる大人の力には到底及ばないのだ。まるで何かに取り憑かれたような、甲高い、悲痛な叫びにも聞こえる。

春美はゲーム機を見つめた。モニター画面が真っ赤な色に明滅している。

そつと覗きこんでみると、映し出された映像の中の建物が炎上している場面だった。

もしかして、これって、この旅館の映像では……。

窓の外を見ると、客室棟のあちこちから火の手が上がっている。そしてこの資料館の裏手からも、いつの間にか赤い炎が噴き上げていた。

春美は振り返った。人形 あの人形を探さなきゃ！
早くしないと、この資料館まで焼けてしまう。

と、そのとき、春美の目に飛び込んだのは……。

「奥さん、こんなところにいらしたんですか！」

田川俊子が目の前に立っていたのだ。

春美は近寄って、その肩に手をかけた。

俊子はしばらくキョトンとしていた。そう、まさか自分の姿を見つけてくれるとは思ってもいなかったのだ。

「あなた……私が見えるの？」

「何を言ってるんですか！」

春美は叫んでいた。「奥さん、あの人形はどこにあるんですか」

「人形、って……」

「あの子が持っていた人形ですよ。あの人形のせいでこの旅館は」

「分かってるわよ！」

俊子は遮った。「あの人……あの人がこの人形に乗り移って、私を殺そうとしているのよね」

「あの人？」

春美は訝しげに訊いた。「あの人って、もしかしたらこの旅館の改築に携わった人のことじゃないですか？ 人形をお土産にもらつていったという……」

「あなた、知ってるの？」

「直接知っているわけじゃないけど、先代の社長がお気に入り、代々受け継がれてきた人形を渡したと聞きました。確か、工事関係の人だったとか」

「そう……そうね」

俊子は呟くように言った。「私の亭主だったの。この旅館で商談

を済ませた後、自宅前で死んだわ。 事故だね」

その言葉を、春美は黙って聞いていた。

マネージャーの話、そしてさっき聞いたばかりの江島の話が、春美の中で響き渡っている。

側溝に落ちた亭主を、見殺しにした、と江島は言っていたが……。自分の亭主を殺すなんて、この人にできるだろうか。

「嘘つくな！」

マネージャーの下で、信二が叫んだ。「お前が殺したんじゃないか！」

「信二、何を言ってるの？ そんなこと言ったらダメでしょ」

「ちゃんと見た奴もいるんだからな」

「だ、誰よ」

「ほら こいつだよ」

と言った信二の視線が、マネージャーの背中に移る。

足下から這い上がって来た人形が、その背中に登ろうとしていた。マネージャーは信二に気を取られて気づいていないらしい。

人形は背中の上に座ると、俊子を細い目でそっと見上げる。そして紅色に塗られた細い唇が、薄っすらと笑みを浮かべた。

俊子の足がビクツと震えた。

人形はあざ笑うかのように、背中を乗り越え、信二の顔の横に移動する。

その途端、マネージャーの身体が弾かれるように信二から飛び離れてしまった。

「さて、第二ステージのクライマックスだね。悪い奴は殺さなきゃ」人形を抱き上げた信二が、そう言って笑った。

「奥さん、どういうことですか？」

春美は人形を見つめたまま訊いた。

「私は……」

「ねえ、信二君。どういうことか、お姉さんに教えてくれないかな」と、春美は言った。「そのお人形、生きてるのよね」

「こいつはね、お父さんに抱かれていたんだよ。水に浸かった側溝の中でね」

信二の顔から笑みが消えていた。

「お父さんが亡くなったとき、信二君はどうしてたの？」

「僕、お部屋で寝ていたんだ。そしたら、僕を呼ぶ声が聞こえたの。今まで聞いたこともない声でさ、泣きながら『お父さんを助けてあげて』って何度も言い続けてたよ」

人形が、ゆっくりとした足取りで、信二の膝の上に座る。その髪を、信二は優しくとかしていた。

春美は怖がるどころか、笑みさえ浮かべて見つめた。

「それが、このお人形だった、ってわけ？」

「うん。声が聞こえる方へ歩いて行ったら、お父さんの腕の中で泣いていたんだ、こいつ。僕はお父さんを助けようとしたけど、もう、だめだつて分かったんだ。顔は全部水に浸かっていたし、僕も怖くなって……。だから、お母さんを呼びに行ったんだ」

信二は凍るような目で俊子を見た。

「な、何よ！」

「あのおじさんと、布団の中で笑ってたんだよ。裸でね。お父さんが死ぬまで待つていよう、って言いながら」

信二がゆっくりと立ち上がる。「あの時から、こいつと二人で計画を練っていたんだ。お父さんの仇を討つ計画をね」

資料館の裏手で、大きな爆発音が聞こえた。何枚かの大きなガラス窓が、風圧で吹き飛ばされる。

渦を巻くような熱風が、資料館の部屋の中に吹き荒れた。

信二に抱かれた人形の髪が、風に巻かれて踊り狂っているようでもある。

春美が信二の前に立ちはだかった。

「ねえ、信二君。仇を討つって、どういうこと？」

「だから、悪いことをした奴は消してしまうんだよ。この世と
いう画面の中からね」

信二が一步進み出た。その手にはいつの間にか、鋭いナイフが握られている。

「ちよつと待つて。信二君が殺したいのはお母さんでしょ。それなのに、関係ない人が二人も死んじゃったわ。あれはどういうこと？」

「さつきも言っただる悪いことをした奴は、つて。あいつら、消されてもいい人間だつてこいつが言つてたんだよ。だから、練習のもりだつたんだ」

「練習？ そんなことで人を殺すの？」

「気にするなよ。どうせここにいる奴らも、みんな殺すつもりなんだから」

信二が笑つた。「大人なんて、みんな嘘つきじゃないか！」

もちろん明るい笑いではない。その目には、燃えるような憎悪の光が見えていた。

抱かれていた人形が、その手から離れて宙に浮いた。

資料館の中を見回すように首を廻めぐらせると、スツと瞬間移動でもしたのか、真つ赤に輝いているゲーム機の上で髪を逆立てている。

資料館の中を風が巻き始めていた。

跳ね飛ばされた勢いで、マネージャーは床にしたたか頭をぶつけていた。意識が朦朧とし、目が覚めるまでどれくらいかかったのだろうか。

気がついてみれば、資料館の窓が破れ、吹き込む風と共に、燃え盛っている木々の火の子が部屋の中を乱舞しているところだった。

目の前に春美が立っている。手を硬く握り締め、少年を静かに見下ろしていた。

その少年が手に持っている物は　マネージャーが自分で持つて来たナイフではないか。まさか、春美を刺そうとでもいうのか！

マネージャーは起き上がろうとしたが、まだ体がいうことをきいてくれない。

少年が春美に一步近づいた。

「ねえ、そこをどいてよ。お姉ちゃんだけは殺したくないんだ」

「そのナイフでお母さんを刺すつもり？」

「だって、ほら」

少年の目がゲーム機に向けられる。人形が小さく肯いた。

「お父さんの仇を討つためにここまで来たんだからね」

マネージャーはそのとき初めて、宙に浮いている人形を見つけた。

「だめよ、そんなことをしたら。どんな理由があるにせよ、自分の手を汚したらダメ」

「今さら遅いよ」

「そんなことない。こんな形で仇を討つたって、お父さんは喜ばないわ」

と言つて、春美は信二の前に立ちふさがった。「さあ早く！ そのナイフをしまいなさい！」

「うるさい、邪魔するな！」

信二がナイフを構えた。

「春美君、危ない！」

マネージャーが立ち上がって、素早く駆け寄った。信二を取り押さえようとしたのである。

と、その時、突然マネージャーの視界に、信二の母親である俊子が姿を現した。

ギョツとするマネージャーに構うでもなく、俊子は信二の前進み出た。

「奥さん、危ない！」

春美が叫んだ。しかし信二が持っているナイフは、俊子の胸の辺りに狙いを定めている。

もう間に合わない。信二は母の胸を貫くのだろう。

「春美君、あの人形だ！」

マネージャーが叫ぶと同時に、春美は宙に浮かんでいる人形に飛び掛っていた。

両手で握り締めると、そのままゲーム機の画面へと身体ごと落ち

る。人形はその手から飛び出ようとしたが、春美の力はそれを阻止するほどのものであった。

どこからか爆発音が聞こえたかと思うと、破れた窓から、焼けた鉄片が飛び込んで来た。そして、ゲーム機の側面に突き刺さる。

古くなつて埃がたまっていたゲーム機が燃え上がるのに、ためらうほどの時間がかかることはない。

まるで悲鳴を上げるかのように、真つ赤に輝いたモニター画面が、観念したかのように暗くなつて行く。

「信二君、早く目を覚まして！」

春美が大声で言った途端、ゲーム機の中から炎が吹き上がり始めた。

助けなければ、と思つても、マネージャーは近寄ることすらできず、炎に包まれた春美と人形の姿を確認するだけで、後はその場から逃げることにしかなかった。

信二の手から、ナイフが落ちた。

永い眠りから目覚めたように、呆然として辺りを見回している。

そして母親の姿を見ると、大粒の涙を流しながら泣き始めた。

「信二、大丈夫？」

俊子が息子を抱きしめた。「もういい、お母さんが悪かった。

ごめんね」

「お母さん、熱いよ……」

ゲーム機から吹き出た炎が、壁を伝つて天井まで触手を伸ばしているのだ。

俊子は、ゲーム機の上で火に包まれている一つの塊を見ていた。それはもう、自らの力では動くことのできない、黒い物体と化そうとしている。

ゲーム機が小さく爆発して、黒い塊が少しだけ傾いた。その隙間から、抱かれていた人形の腕がドラツと下がる。

その手が大きく開いたかと思うと、悔しさなのか、無念さなのか、ギョツと硬く握られた。そして、炎の中で、溶け出していたのだっ

た……。

突然腕を？まれて、俊子はギョツと振り返った。

「奥さん、早く逃げてください！」

血相を変えたマネージャーが、俊子の身体を支えながら、出口の方へと引つ張ろうとしている。

「ちよつと待つて！」

「早くしないと、この資料館は焼け落ちてしまいます」

「信二！ 早く 早く来なさい！」

信二はその場にうずくまって、大声を上げて泣いていた。

マネージャーが駆け寄ってその身体を抱える。そして俊子を促すようにして、資料館を抜け出した。

中庭の中央まで来たところで、三人は倒れ込んだ。その途端、資料館の中から爆発音が轟いた。

窓から炎が噴き上がる。まるで過去を消し去ってしまうかのような強烈な火柱が、俊子の目の前で荒れ狂っていたのだった。

轟音と共に、資料館の屋根が崩れ落ちた。

その時、誰かの悲鳴を、俊子は聞いたような気がしたのだった……。

その九

(九)

秋晴れの気持ちいい日になるはずだったのに、どうしてこんなこと……。

九月も半ばを過ぎた大安の日曜日、台風が直撃しようとしているのである。

しかし、今さらキャンセルするわけにも行かないしね。

ウエディングドレスに身を包んだ俊子は、その場にはふさわしくないため息をついた。

豪華な結婚式場 ではなく、手頃なホテルの宴会場で、日延べになっていた披露宴がやっと始まっていた。

前置きの長い来賓の挨拶がやっと終わり、お色直しと共に盛大な宴が始まるのである。

会場の扉が開く瞬間を、俊子は複雑な思いで待っていた。

この雨の中を、全員が出席してくれた。それだけでもありがたかったが、台風の上陸はこの披露宴が終わるころかもしれない。

私、恨まれるんじゃないのかな、とも思った。でもおめでたいことなんだから、ま、いいか……。

式場の中に、賑やかな音楽が流れ始めた。新郎新婦の入場である。開いたドアの向こうから、純白に輝く新婦にスポットライトが浴びせられた。

招待客の新婦の友人席で、小さく囁かれている会話が あった。

「あの新郎の包帯、どうしたの？」

「それがさあ、婚前旅行に行ったとき、火事に巻き込まれたんだって」

「火事に？ そんな話、聞いてなかったけど」

新婦の後ろを歩いて来る新郎の頭に、派手ではないが、さりげなく包帯が巻かれている。よく見ると、袖の中から手のひらまで包帯が巻かれているようだ。

「でも旅行って、四ヶ月くらい前のことでしょ？」

「そんなんだけど、なかなか治らないんだって。打撲とやけどだけなんだけど、怪我をしたときと全く変わらないらしいのよね」

「ふーん、不思議なこともあるのね」

新郎新婦がその席の横を歩いて来て、会話が中断する。友人たちが振り向いて、祝福の拍手を送っていた。

「でも、ちよつとおかしいのよね」

「何が？」

「私、新聞で見たんだけど、火事といっても、現在は使われていない古い建物だけが焼けただけだって書いてあったの。それなのに俊子だったら……」

その友人に、俊子はすべてを話していた。

旅館の中で迷子になったこと。厨房で板前が焼け死んだり、客室から出て来た老婆が弾かれるようにして潰れ死んだこと。そして資料館での、あの出来事。その後、客室棟はほとんど焼けてしまったというのだ。

しかし新聞では、資料館だけがぼやで焼けた、という記事だった。厨房の板前も、客室の老婆も、周りの情報では単なる事故だったという。偶然のことではあるが、資料館の火事とは何の関係もないという世間の見方があったのである。

そして友人は、仲居である春美が、人形と共にゲーム機の上で焼け死んだことも聞かされていた。

ところが記事によると、火事による犠牲者は一人も出ていないと報じていたのである。

俊子はそのことだけを、しきりに話していた。なぜなら、資料館の焼け跡からは、犠牲者となるような焼死体は何一つ発見されなかったからである。

「それじゃ、旦那はどうして？」

「酒よ、酒。酔っ払ってさあ、旅館の仲居さんにちよっかいを出していたらしいわ。そこで火事にあって、気を失ってたらしいのよね」

新郎新婦が高砂の前で頭を下げて、会場は拍手の渦に包まれた。

「それじゃ、俊子、騙されてるの？」

「どうでしょうね……。似たもの夫婦、つてとこかな」

新婦の友人席に、静かな笑いが起こった。

さあ、宴の始まり、というところで、照明がグツと落とされる。

セレモニーのスタートは、夫婦として初めての共同作業となるケーキカットであろう。

俊子と江島が係員に促されて、高くそびえるケーキの前へと移動した。

このケーキ、こんなに大きかったつけ。経費節減のため、小さなものにしたはずだったのに……。

そう思いながら、俊子は会場を見回した。

と、親族席に信二の姿が見えない。トイレにでも行っているのだろうか。

俊子は近くにいたホテルのマネージャーを小さく手招きする。そして、

「うちの子供、見ませんでした？」

と、訊いた。

「ああ、心配いりません」

マネージャーは営業用であろう、満面の笑みで言った。「裏の倉庫で遊んでいらっしやいます」

「倉庫って、立ち入り禁止なんですよ？」

「ええ、そうなんです、本当に楽しそうに遊んでいらっしやったんでね。私どもとしては一向に構いません」

「そうですか……」

と、俊子は力なく言った。「それで、何をして遊んでいるんです

の？」

「実は、古くなったゲーム機が置いてありましてね、もう使えなくなっただと思っただけなんですが、子供というのは不思議ですよ。器用に動かして遊んでいますよ」

「ゲーム……」

俊子の顔がこわばった。

「それに、最近このホテルに入社したばかりの女の子がつかっていませんから、安心してください」

ウェディングケーキが輝いた。いや、もちろんスポットライトが照らされたのである。

司会者の明るい声が響いた。

「新郎新婦による、ケーキ入刀です。カメラをお持ちの方、どうぞお集まり下さい」

ムードを盛り上げるようなBGMの中、友人たちがケーキの周りに集まる。

芸能人の記者会見並みに寄って来たカメラのレンズが、鋭く尖ったナイフを手に持っている新郎新婦を見つめている。

BGMのボリュームが最大に上げられた。

「ケーキ、入刀！」

俊子と江島が、二人の力でナイフを持ち上げる。そして豪華に飾られたウェディングケーキのその場所に、一気に突き立てられた。

カメラのフラッシュが瞬く。

その感触を両手に感じながら、俊子はナイフを握っていた。

モニター画面が真っ赤に輝き始めた。

裏の倉庫でゲームに熱中していた信二は、次のステージに移れる場面とあって、はやる気持ちを抑えられないでいた。

「さあ、今度こそ一気に殺してやる！」

そう言いながら、何年も使われていなかったと思われるゲーム機に、信二は熱中していた。

「だめよ、一気にやったら。悪い奴は、じわじわ殺してやらないと」
信二の横で、女が言った。

「そんなこと言うから、いつもやり損なっちゃうんだよ。あの時だって、お姉ちゃんが邪魔したんじゃないか」

「だって信二君、自分で殺そうとしたからでしょ。人形に任せるから、って言うてたじゃない」

「最後は僕の仕事だよ。あれはゲームじゃなくて、お父さんの仇なんだから。それにあの人形だってかわいそうだよ。そろそろ休ませてもらえないと」

「大丈夫よ。いくら乱雑に扱われたって、何百年も生き続けているタフな奴なんだから」

と言つて、女は得意げに笑った。

ゲーム機のモニター画面が明滅し始めた。次のステージに移行する合図らしい。

「ねえ、今度はお姉ちゃんにもやらせてよ」

「うん、いいよ」

「私だってあいつをやっつけたいんだから」

信二に代わって、女がゲーム機のレバーを握る。もちろん女とは、資料館で焼け死んだはずの春美である。和服姿でいるのは、このホテルに雇われて、披露宴のコンパニオンとして来ていたからであった。

モニター画面が明るく輝いた。

「思い切つて、一気にやっちゃうか！」

春美が笑顔で言った。

信二と春美が手を握り合った。そしてその二つの手が、赤いボタンに乗せられようとしていた。

カメラのフラッシュが一齐に瞬いた。

予想外にその数が多かったため、ナイフがケーキに突き刺さった瞬間の映像は、俊子も江島も、目が眩んではつきり見えていなかった

た。

歓声が、どよめきに変わった。

何が起こったのか、誰にも分からない。これもセレモニーの中の演出なのか、としか思えなかったのである。

ナイフが突き刺さったウエディングケーキから、赤黒い液体が飛び散る。そして、返り血を浴びたように、純白のドレスが真っ赤に染まっていた。もちろん俊子の顔も、江島の頬からも、その液体は筋を引いて流れている。

「何、これ？」

俊子の笑顔が凍りついた。

「お前こそどうしたんだよ」

江島は状況を把握できないらしく、カメラ視線を気にしながらニタニタ笑っていた。

ギシツ、と音がして、二人の手に力が入る。何の音か分からないが、金属が触れ合う鈍い音だ。

そして、砂状のものが、二人の頭上から降って来た。

俊子と江島が、上を見上げた。そこにある豪華なシャンデリアが、小さく揺れている。

笑い声が聞こえた。どこから聞こえたのかは分からないが、あざ笑うかのような不気味なものである。

俊子の表情が凍りついた。ナイフを抜こうとしたとき、余計な力が入ったのかもしれない。

ケーキのバランスが崩れ、半分が砕け落ちた。その中から、黒く焼け爛れた人形の顔が出て来たのである。

髪はちぢれ、白いはずの顔もすすくれている。そして、焼け落ちたはずの細い腕が、突然生クリームの中から突き出てきた。

人形が笑った。新しい戦いの場を見つけたかのような、歓喜に満ちる雄たけびにも似た形相である。

披露宴会場に、俊子の叫び声が響いた。

何かが軋むような音が聞こえる。それが天井から吊るされた大き

なシャンデリアが揺れている音だとは、誰も気づいていない。

そしてその中に、子供の笑い声が混在していたのは気のせいだろうか……。

俊子と江島が、真上の天井を見上げる。

鈍い音と共に、シャンデリアが天井からはがれる瞬間を、同時に見ていた。

そして二人は、天を仰ぐように両手を広げた。

信二と春美が、赤いボタンを押した。

そして信二は呟いたのだった。

「お父さん、ゲーム、終わったよ。もうリセットはしないからね……」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6857r/>

殺人ゲーム

2011年4月15日13時10分発行